
農作物生産情報

(令和2年7月)

気象

(令和2年6月18日 仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報より)

暖かい空気に覆われるため、向こう1か月の気温は高い見込みです。

期間のはじめは、前線や湿った空気の影響を受けにくく、日照時間は平年並か多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

水稲

中干しで「根づくり」、幼穂形成期深水かんがいで「花粉づくり」、適正追肥で「買ってもらえるおいしい米づくり」を進めよう！

1 生育状況 (6月20日現在)

(1) まっしぐら (管内9地点の平均)

平年と比較して、草丈はほぼ平年並み、茎数は少なく、葉数は平年並。葉数から見た生育の進み具合は平年並みであると考えられる。

(2) つがるロマン (管内7地点の平均)

平年と比較して、草丈はほぼ平年並み、茎数は少なく、葉数は平年並。葉数から見た生育の進み具合は平年並みであると考えられる。

(3) 青天の霹靂 (管内11地点の平均)

平年と比較して、草丈はやや長く、茎数は多く、葉数は少なかった。葉数から見て生育は2日程度遅くなっていると考えられる。

2 水管理

(1) 分けつ盛期～穂首分化期 (6月下旬～7月上旬)

1株当たり茎数を「まっしぐら」・「つがるロマン」では20本程度(栽植株数が70株/坪程度の場合)、「青天の霹靂」では18本程度確保した水田では、晴天で高温日(平均気温20℃以上)が続くような時は中干しを行う。

中干しには、窒素の過剰発現の抑制、草丈の伸びの抑制、根腐れ防止等の効果がある。田面に軽くひび割れが入る程度とし、排水不良の水田では、2回くらい繰り返すと効果的である。ただし、生育が遅れている場合や低温が予想される場合は行わない。また、幼穂形成期までに必ず終える。

(2) 幼穂形成期

幼穂形成期(主茎の幼穂長2mm、出穂前25日頃)から穂ばらみ期にかけては、花粉を形成し、また、稲の吸水量が多くなり、低温や干ばつに弱い。このため、幼穂形成期に達したら、気温の高低に関係なく水深10cmで10日間の「幼穂形成期深水かんがい」を実施する。

(3) 穂ばらみ期

穂ばらみ期に当たる出穂前20～11日頃（主茎の葉耳間長が-12cm～+4cmの頃（「図-1 葉耳間長の見方」参照）は、最も低温に弱い。日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下になると予想される場合には、可能な限り深水（15～20cm程度）にして幼穂を保護する。ただし、冷水を急に入れると水温が下がるので、徐々に水を深くする。

高温時は、4cm程度の浅水にして水温の上昇を促し、時々水の入れ換えを行い、根の老化を防止する。

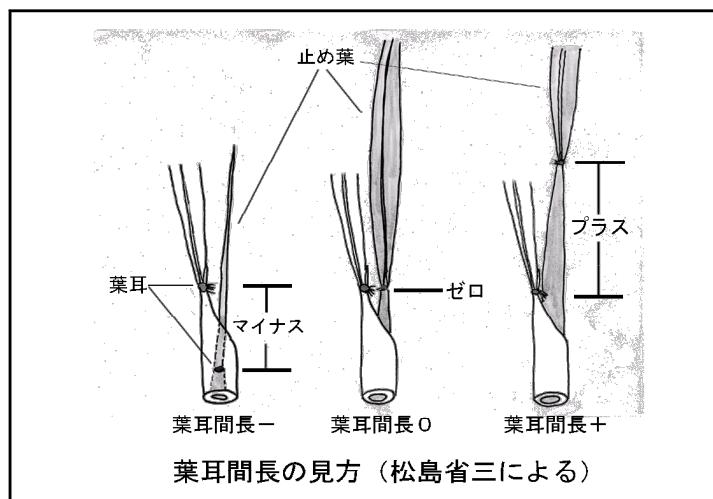


図-1 葉耳間長の見方

■ これからの水管理

生育期	寒い日	暖かい日	備考
分けつ盛期～穂首分化期（6月下旬～7月上旬）	5～6cm程度の深水	中干し	中干しは幼穂形成期までに終える。
幼穂形成期（出穂前25日頃）	幼穂形成期深水かんがい（水深10cmで10日間）		
穂ばらみ期（出穂前20～11日頃）	15～20cm程度の深水	4cm程度の浅水 時々、水の入れ換え	日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下で、障害不稔発生の危険が増す。

3 追肥

幼穂形成期（主茎の幼穂長 2 mm）に達し、かつ肥料が切れて葉色が淡くなっていれば追肥の適期である。

(1) 「つがるロマン」、「まっしぐら」

追肥量は、生育状況を見ながら「つがるロマン」では窒素成分で10 a 当たり 2 kg以内、「まっしぐら」では2～3 kg程度とする。

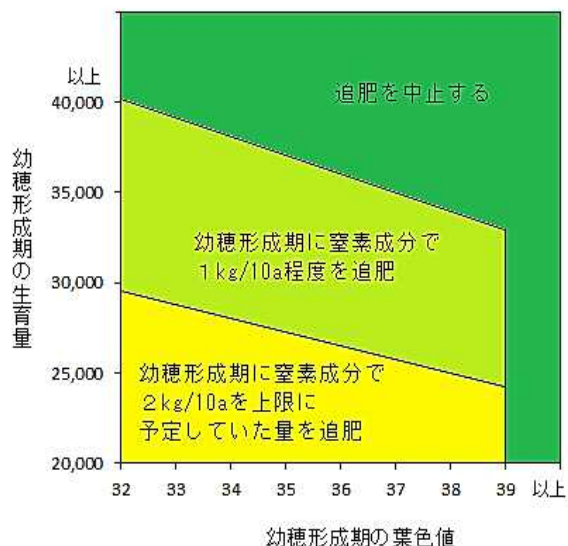
幼穂形成期に達しても葉色が濃い場合は、幼穂形成期後 7～10日までの間に葉色が淡くなったら追肥し、この時期を過ぎても葉色が淡くならない場合は、追肥しない。また、出穂前後の追肥（実肥）は、米の食味・品質を低下させるので行わない。

(2) 「青天の霹靂」

追肥時期は幼穂形成期とし、それ以降は行わない。

「青天の霹靂追肥判断カースケール」等を用い、実際に生育調査を行った上で、追肥の有無・追肥量を栄養診断基準を参考に決定する。生育後半に土壤窒素発現量が多い水田では、無追肥とする。

生育指標 (幼形期の草丈 × m ² 当たり茎数 × 葉色値)	10a当たりの追肥対応 (窒素成分量)
95万未満	幼穂形成期に窒素成分で 2kg/10aを上限に 予定していた量を追肥
95万以上 ～ 129万未満	幼穂形成期に窒素成分で 1kg/10a程度を追肥
129万以上	追肥を中止する



注) 幼穂形成期の生育量は草丈×m²当たり茎数で算出、葉色値は葉緑素計で測定

4 病虫害防除

(1) 斑点米カメムシ類

水田周辺の休耕田や畦畔・農道等の雑草地に生息しているので、雑草が開花・結実しないよう刈取や耕起をこまめに行う。なお刈取等は出穂2週間前（7月中旬頃）までに終了する。

水稻の出穂以降に雑草を刈り取る必要がある場合は、斑点米カメムシ類に効果のある殺虫剤を水田に散布した後、速やかに行う。

ノビエ、シズイ、クログワイの多発田では、水稻の出穂前から斑点米カメムシ類が水田内に誘引され、斑点米率が高くなるので、除草や防除を徹底する。

(2) 葉いもち

葉いもちの初発生は、近年、6月末から7月上旬に確認されている。早期発見・早期防除が基本であり、発生状況に十分注意し、病斑を見つけしだい防除を徹底する。

(3) 稲こうじ病

穂ばらみ期の低温や日照不足、多雨で発生しやすくなるので、前年発生した水田を中心に、出穂前20日～10日に防除を行う。

防除時期が遅れる（出穂前10日以降）と、防除効果の低下や薬害の恐れがあるので注意する。

畑 作

◆ 大 豆 ◆

中耕培土・害虫防除をしっかりと行い、品質向上に努めよう！

1 中耕・培土

中耕・培土は根に空気を通し、根粒菌を活動させ、不定根の発生や根系の発達を促進し、さらに倒伏防止効果がある。

1回目は本葉2～3葉期に行い、初生葉のつけ根まで軽く土寄せし、2回目は本葉5～6葉期に行い、第1本葉のつけ根まで土寄せする。

最終培土は、開花10日位前（7月20日頃）に終える。培土の高さは、コンバイン収穫時に支障がない程度とする。

2 除草

発生している雑草の種類、大きさ、大豆の生育状況に合わせて除草剤を効果的に使用する。

(1) イネ科選択性除草剤の茎葉散布

雑草が大きくなると効果が劣るので、各薬剤の使用時期の範囲内で使用する。

(2) 広葉選択性除草剤の茎葉処理

広葉選択性除草剤の茎葉処理は、「大豆バサグラン液剤」と「アタックショット乳剤」がある。両剤とも「薬害と収量に及ぼす影響及び除草効果の注意書き」を確認のうえ使用する。大豆の2葉期以降に使用できるが、雑草が大きくなると効果が劣るので、発生状況に応じて使用する。

(3) 畦間、株間処理

土壌処理、茎葉処理を行っても残草が多い場合は、畦間、株間処理除草剤が利用できるので、薬剤の特性に合わせて効果的に利用する。

大豆に薬剤が付着すると薬害が発生するため、泡状ノズルやカバーで飛散しないよう散布する。

3 追肥

子実を充実させるため、開花期前後に追肥する。追肥量は、窒素成分5～8kg/10aであるが、生育状態に応じて加減し、生育が旺盛な場合は行わない。

◆ 小 麦 ◆

適期刈取りに努め、良品質小麦を確保しよう！

1 収穫作業

県生育観測ほ（つがる市）の「ネバリゴシ」の生観ほの出穂期は、平年より6日早い5月14日、「キタカミコムギ」が5日早い5月16日であった。

「ネバリゴシ」は出穂後46～50日、出穂後積算気温830～950℃、「キタカミコムギ」は同様に51～55日、900～1,000℃が刈取適期であり、共に子実水分25%を目安とする。

「キタカミコムギ」は穂発芽しやすいので、天候しだいでは子実水分30%での刈取が必要になる。この場合は速やかに乾燥機に張り込み、水分25%までは送風温度を40℃以下にして品質低下を防ぐ。

■ 積算気温からみた収穫期の目安

品種 出穂期	ネバリゴシ		キタカミコムギ	
	830℃	950℃	900℃	1,000℃
5月15日	7月2日	7月8日	7月5日	7月10日
5月20日	7月5日	7月11日	7月8日	7月13日
5月23日			7月10日	7月15日

注) 五所川原アメダスの日平均気温（6月21日以降は平年値）で算出
天候やほ場の成熟状況、水分を確認して刈取時期を判断する。

りんご

黒星病の被害果、被害葉は可能な限り摘み取ろう！
ていねいな見直し摘果で良品生産を！

6月21日現在、県生育観測ほ（板柳町五幾形）のふじの果実肥大は、横径3.4cmで、平年（3.1cm）を上回っている。

1 摘果の見直し

黒星病の被害果がみられる場合は、着果状況を考慮し可能な限り摘み取る。また、良品生産に向け、一通り仕上げ摘果を終了した園地では、再度園地を見回り、摘果の見落としがないか、障害果や小玉果等の品質不良果がないか点検する。

2 袋かけ

ふじは、有袋にすることで、つる割れの軽減や着色が向上し、収穫期が分散される。特に本年は大玉傾向で、夏場の多雨によるつる割れの発生が懸念されるので、有袋栽培に積極的に取り組み、7月10日ころまでに終わるようにする。なお、袋かけ時に黒星病の被害果が見られた場合は摘み取る。

3 徒長枝の整理と支柱入れ

病害虫の発生源を少なくし、薬剤の付着を良くするために不要な徒長枝を整理する。また、支柱入れや枝つりを行って樹の内部にも十分日光を入れ、葉の働きを高める。

4 病害虫防除

斑点落葉病やモモシンクイガ、ハダニ類の増加期に入るので、発生動向に十分注意して散布間隔をあげずにスケジュール散布を行う。

■ 薬剤散布（県りんご防除暦より抜粋）

「農薬はりんご園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。」

時期と散布量	主な対象病害虫	基準薬剤
7月初め (500 ^{リットル} ／10a)	斑点落葉病 ハダニ類 モモシンクイガ キンモンホソガ	ピレスロイド剤 ----- アントラコール顆粒水和剤 500倍 又はパスポート顆粒水和剤 1,000倍 又はチウラム剤 500倍 又はオキシラン水和剤 500倍 又は有機銅剤
7月半ば (500 ^{リットル} ／10a)	斑点落葉病、褐斑病 ハダニ類 モモシンクイガ リンゴコカクモンハマキ	アントラコール顆粒水和剤 500倍 又はパスポート顆粒水和剤 1,000倍 又はオキシラン水和剤 500倍 又は有機銅剤
7月末 (500 ^{リットル} ／10a)	斑点落葉病 褐斑病 キンモンホソガ ハダニ類 モモシンクイガ	オキシラン水和剤 500倍 又は有機銅剤 又はアリエッティC水和剤 800倍 又はダイパワー水和剤 1,000倍 又はベフラン液剤25 1,500倍

注) 殺ダニ剤は発生に応じて加用する

(1) 黒星病

黒星病の被害果や被害葉は、園地に放置せず、土中に埋めるなど適正に処分する。

(2) 腐らん病、褐斑病

粗皮感染による胴腐らの発生が多い園地や、前年褐斑病の発生が多かった園地では、「7月半ば」又は「7月末」にトップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍も使用する。

(3) 斑点落葉病

随時、不要な徒長枝を剪去する。

急増の恐れがある場合は、ポリオキシシンAL水和剤1,000倍も使用する。

(4) モモシンクイガ

無袋栽培では、毎回防除剤を散布する。

7月初めに食入防止期間の長いピレスロイド剤（バイスロイドEW、サイハロン水和剤、イカズチWDG）を散布した場合でも、モモシンクイガやナシヒメシンクイの発生が見られている園地や周辺に発生源がある園地では、7月半ばのモモシンクイガ防除薬剤を省略しない。

(5) リンゴコカクモンハマキ

第1世代又は第2世代幼虫の発生が多い園地では、フェロモントラップを利用して適期にサムコルフロアブル10 5,000倍、エクシレルSE5,000倍、テッパン液剤2,000倍、フェニックスフロアブル4,000倍、ディアナWDG10,000倍のいずれかを散布する。

(6) クワコナカイガラムシ

発生の多い園地では、7月下旬と8月上旬に防除剤による胴木洗いを手散布で行う。また、6月下旬にバンド巻きをした園地では、7月中旬（卵のふ化前）に忘れずにバンドを除去する。

(7) ハダニ類

殺ダニ剤は発生状況に応じて散布する。

薬 剤 名	使用 倍数	使用回数	使用時期	リンゴハダニ	ナミハダニ
エコマイト顆粒水和剤	2,000	1	収穫7日前まで	○	○
オマイト水和剤	750	1	収穫3日前まで	○	○
コロマイト乳剤	1,000	1	収穫前日まで	○	○
マイトコーネフロアブル	1,000	1	収穫前日まで	×	○

注) オマイト水和剤は7月下旬までの使用を避ける。

5 ビターピット対策

ビターピットは、幼果期（6月）の少雨や夏期を中心とした生育期間の高温によって発生が多くなる。ビターピットの発生が懸念される場合は、カルシウム剤の果面散布を積極的に行う。

■ カルシウム剤の使い方

資材名	散布時期（散布間隔）	資材形状	倍数	散布回数
スイカル	6月上旬～9月中旬(10日以上)	粉状	300倍	3～5
セルバイン	6月上旬～9月上旬(10日以上)	粉状	400倍	3～5
アグリメイト	6月上旬～9月中旬(15日以上)	液状	500倍	5

注) 樹勢の弱い樹や高温時、あるいは干ばつ時には薬害発生（葉縁褐変）の恐れがあるので避ける。

特産果樹

◆ ぶどう ◆

適期の房づくりで商品価値の高い果房に仕上げよう！

県生育観測ほのスチューベン（鶴田町境）の生育は、開花日が平年より5日早い6月15日、満開日も平年より5日早い6月17日であった。

7月は房づくりや病虫害防除などの作業を適期に行う。

1 スチューベンの果房整形

果粒が小豆粒大頃（果房中間の粒径が5mm程度の頃）に果房の先端を1cm程度切除するとともに、果房の長さが12～13cmになるように果房上部の支梗を切除する。さらに、果房の幅が6cm程度になるように長い支梗を切りつめる。

2 摘房

新梢と果実との養分競合を少なくし品質向上と枝の充実を促すため、早めに行う。着房数は下表を参考にして、実どまりの状態や結果枝の葉数を見ながら調整する。

■ 着房の目安

品 種	結果枝の葉数	着房数
スチューベン、 キャンベル・アーリー	13枚以下	ならせない
	14～18枚	1房
	20枚前後	1～2房
	25枚以上	2房
シャインスカット	20枚程度	1房

3 摘粒

(1) 摘粒の時期

果房形を整え、粒揃いや果粒肥大を促進するため、満開後15～25日頃（7月中旬）から始め、果粒軟化期前（8月上旬）までに終える。

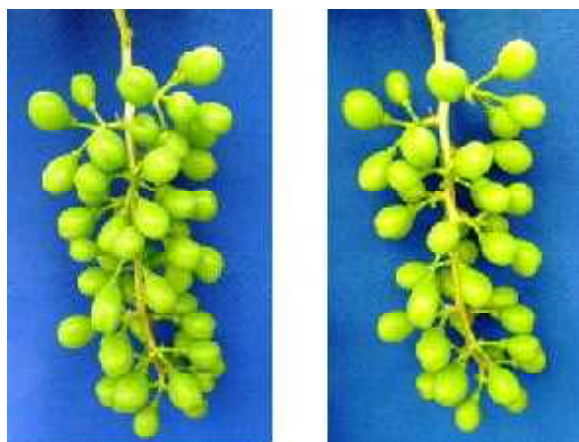
シャインスカットは、大豆粒大（7mm程度）頃までに終える。

(2) 摘粒の目安

品 種	着粒数
スチューベン	70～80
キャンベル・アーリー	50～60
シャインスカット	40～50

(3) シャインスカットの摘粒方法

小粒果やさび果などの障害果のほか、果粒が外向きに並ぶように内側の果粒を除去し、1房45粒程度に仕上げる。早すぎる摘粒は、収穫時に小粒未熟果が混入しやすくなるので留意する。

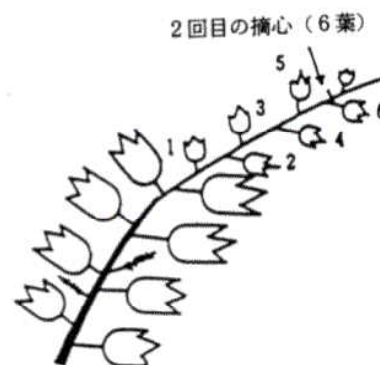


摘粒前後の果房

4 2回目の摘心

1回目の摘心後に伸びた副梢の展葉枚数が8～9枚になった頃に行い、伸びた副梢の葉を6枚残して摘心する。副々梢は2回目の摘心部位の先端のものだけを残して、他は全てかき取る。

なお、これ以降も副々梢が伸びる場合は3～5葉で摘心を行う。



5 病虫害防除

■ 薬剤散布 (県ぶどう防除暦：スチューベン基準より抜粋)

「農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。」

散布時期	薬剤名と倍数		
	殺菌剤	殺虫剤	
大豆粒大 (7月中旬頃)	ジマンダイセン水和剤	1,000倍	アグロスリン水和剤 2,000倍 又はアディオ ンフロアブル 1,500倍
	又はアミスター10フロアブル	1,000倍	
	又はストロビードライフロアブル	2,000倍	
	又はホライズンドライフロアブル	2,500倍	

- 注) 1 大豆粒大以降、展着剤は使用しない。
 2 ジマンダイセン水和剤 (有効成分：マンゼブ) の年間使用回数は「2回以内」である。
 3 スチューベンで晩腐病の発生が多い園地では、小豆粒大 (7月上旬頃) にベンレート水和剤3,000倍を特別散布する。
 4 シャインマスカットでは灰色かび病対策のため、アミスター10フロアブル又はストロビードライフロアブルを選択する。
 5 ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及び、同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は年1回以内の使用とする。
 6 ハダニ類の発生が多い園地ではマイトコーネフロアブル1,000倍又はカネマイトフロアブル1,000倍を特別散布する。
 7 コガネムシ類の発生が7月下旬にみられる場合は、アグロスリン水和剤2,000倍、アディオンフロアブル1,500倍、スミチオン水和剤40 800倍のいずれかを特別散布する。

5～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です

農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう

- 使い残した農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

◆ おうとう ◆

翌年度の生産を見据え、収穫後の防除を徹底しよう！

1 収穫（晩生種）

適期収穫に努め、収穫遅れにならないようにする。また、灰星病やショウジョウバエ対策として、収穫前日頃を目安に有効な薬剤を特別散布する。

2 雨よけ被覆資材の除去

樹体に対する悪影響を避けるため、収穫後速やかに除去する。

3 施肥（礼肥）

樹勢維持と花芽分化促進のため、収穫後できるだけ早く施肥する。施用量は年間施用量の20%程度とする。

4 病虫害防除

■ 薬剤散布（県おうとう防除暦：佐藤錦の基準より抜粋）

「農薬は、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。」

散布時期	薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
7月中～下旬 (収穫後)	オーソサイド水和剤80 800倍 又はオキシラン水和剤 600倍 又はチウラム剤 500倍	スプラサイド水和剤 1,500倍

注) 褐色せん孔病（せん孔病）や、ハダニ類が発生すると早期に落葉し次年産の花芽充実に影響するので、収穫後散布を必ず実施する。

農作業中の熱中症に注意しましょう

～熱中症は適切な予防をすれば防ぐことができます～

- 暑さの感じ方は人によって異なります。高齢の方は特に注意が必要です。
- 皆で協力して、熱中症予防を呼びかけ合うことが大切です。
- 天候の変化が激しい時期ですが、高温が予想される日は、熱中症予防を忘れないようにご注意ください。

野菜

適切な温度・水分の管理で品質向上に努めよう！

◆ トマト ◆

1 かん水と追肥

かん水は、午前8～10時頃に行い、7段花房開花期頃まではかん水量を一定（1株当たり1.5リットルを目安）とし、生育や天候を見ながらかん水の間隔を調整する（1日おき→2日おき）。ただし、予想最高気温が28℃を超える日は、1株当たり2リットルを目安とする。2本仕立ての場合は、側枝1本を1株とする。

茎葉にしおれが見られたら、直ちに1株当たり0.7リットルかん水し、2～3時間してもしおれが回復しない場合は、再度0.7リットルかん水する（高温時は1株当たり1リットルを2回）。

開花花房の上葉のねじれの有無を観察し、ねじれのある株が7割以下になったら追肥する。

2 葉先枯れ（カリ欠乏症）対策

葉先枯れ症状は、根張りが悪かったり、土壌中のカルシウムなどが過剰になると、カリの吸収が妨げられて発生しやすい。また、高温により徒長した場合でも葉内のカリが欠乏して発生するので、予防としてメリット黄 400倍を1段につき2～3日おきに2回、開花花房を中心に葉面散布する。

症状が見られた場合は、カーボリッチ又はカリグリーン800倍を4日おきに2回、全葉に散布する。ただし、極端に草勢が弱い場合は使用を控える。

葉先枯れは、灰色かび病の発生源となるので、枯れた部分は早めに摘除する。

3 高温対策

遮光資材、ハウス塗布資材等を活用して、ハウス内の温度をできるだけ下げる。被覆タイプの遮光資材は、概ね11時～14時頃までの展張とし、かけっぱなしにしない。

4 病害虫防除

曇雨天が続くと灰色かび病や葉かび病が発生しやすくなるので、予防防除に努める。高温乾燥でアザミウマ類、アブラムシ類、オオタバコガの発生が多くなるので、防除を徹底する。

ほ場周辺や園地などの草刈作業が多くなる時期です
刈払機や草刈機の事故に注意しましょう！

- 作業の前に、草むらに潜む穴や切り株、石、空き缶などを点検しましょう。
- 保護具を身につけ、飛散防止カバーは外さないで作業をしましょう。
- 草詰まりの除去や刈払機を置くときは、必ずエンジンを停止しましょう。

◆ メロン ◆

1 ネット発生後の管理

ネット発生以降は、最高気温28～30℃ 最低気温15～18℃を目安に管理する。
ネット完成時は換気を十分に行い、日中しおれない程度にやや乾燥気味の管理とする。

草勢をみながら、3～5日おきに3回程度、葉面散布を行う。

		N-P-K
(例)	青……生育促進、葉色改善	(7-5-3)
メリット	黄……着果促進、果実肥大	(3-7-6)
	赤……成熟促進、徒長抑制、花芽分化	(0-10-9)

成熟期の草姿・草勢は、収穫7～5日前で、「晴天日の昼間には少ししおれ、夜には回復するぐらい」が望ましい。

最低気温が20℃以上では糖度が上がりにくくなるので、外気の最低気温が15℃以上であれば、トンネルを夜間開放する。

2 収穫

着果後の日数、外観の変化、試食など総合的に判定する。

タカミの場合、①結果枝の葉が徐々に枯れる、②果皮が濃緑から黄緑色に変わる、③へたの周囲が突起し、離層が形成される、の順に現象がみられるので収穫期の判定基準とする。

3 果実の生理障害

(1) 裂果

果実肥大時、果肉の肥大に果皮の伸びが追いつかなくなって発生するが、着果から鶏卵大前まで・ネット形成期・収穫期の3つのステージが特に危険性が高い。

収穫期の裂果は、開花後40日頃までの期間の乾燥・低温により肥大が抑えられた後、成熟期の潤沢な養水分吸収によって発生する。また、多肥や未熟な堆きゅう肥の施用で収穫期に草勢が強まった場合も発生する。

対策としては、カルシウム剤の葉面散布や下葉・徒長枝を除去し、急激な肥大を抑える。

(2) 発酵果

窒素・カリ過多、カルシウム不足、高温・照り込みによる草勢の低下、ホルモン着果、低温・乾燥による初期肥大の抑制などにより発生する。

対策としては、カルシウム剤の葉面散布、遮光を行う。

(3) 腐敗果

病原菌によるものと、生理障害によるものと2つある。

対策としては、病原菌の場合は、薬剤散布による予防、生理障害の場合は、発酵果と同様の対策を行う。

花 き

換気や遮光をこまめに行うなど、施設内の温湿度管理を徹底しよう！
病害虫の早期発見・早期防除に努めよう！

◆ キ ク ◆

1 今後の作業

輪ギクの上位葉のわき芽かきは、時期が遅れると摘み取った後の傷が大きくなるので早めに行い、摘蕾は、小豆大の頃に中心の蕾を残して行う。

2 病害虫防除

白さび病、ハダニ類、アザミウマ類、ヤガ類が発生しやすい時期なので、早期発見、早期防除に努める。オオタバコガやヨトウムシ類の侵入を防ぐため、ハウスのサイドや出入口等に防虫ネット（4×4mm目以内）を早めに設置する。

◆ トルコギキョウ ◆

1 今後の作業

十分な換気に努め、可能な限り施設内の温度を下げる。好天が続く場合、短期間遮光（遮光率30～40%）し、施設内の急激な温度上昇を防ぐ。

かん水は、発蕾期からは徐々に控える。

地際から20cmくらいまでの側枝や主茎の頂花蕾（1番花）は、発生したら早めに除去する。また、出荷時に不要となる蕾も早めに除去する。

2 病害虫防除

上記キクを参照

◆ りんどう ◆

1 収穫

収穫適期は、頂花の大部分が色づいた時で、気温が低い時間帯に収穫し、頂花から100cmのところを手で折り取る。

株の養成のため、草丈が130cm以上の場合は、茎を30～40cm程度に残す。草丈が100cm以下の場合は、1株当たり2～3本残す。残した茎は花穂部分を折り取る。

2 選別・調整

(1) 収穫直後

花がしおれていない場合は、選別前の水あげは不要である。

花腐菌核病、オオタバコガの侵入痕等の病虫害があるものを混入しないように選別し、長さ、太さが同様のものを10本1束とし、頂花をそろえて輪ゴムで束ねる。

(2) 水あげ、箱詰め

きれいな水をバケツ等に10cm程度入れて、涼しい場所で吸水させる。4時間程度吸水させたら水から出し、立てて乾燥させておき、翌朝に箱詰めする。